

横山ゆずり作 **「約束の駅」**

<前編>

(効果音) 町の雑踏、車の行き交う音。クラクションの音。

通行人 (ドサッとぶつかって)おっと、危ないなあ。まっすぐ歩きな。

(効果音) 「キキーッ」自転車急に止まる。老婦人、ぶつかって倒れる。

通行人 あ、おばあさん、大丈夫ですか？

(効果音) 「ピーポーピーポー」救急車の音。

(病院の中)

中島はるえ うーん…。あ、ここは…。

看護婦 あ、気がつかれましたか。

はるえ 看護婦…さん。ここは病院…？

ナレーション わたしは、中島はるえと申します。大正 11 年の生まれでございますから、今年で 77 になります。もう身寄りもないものですから、今は老人ホームにお世話になっております。

はるえ すみませんねえ、ご迷惑かけて。

看護婦 いいえ。それよりね、あばあちゃん、大分うなされていたみたいだったけど。

はるえ あら、そうでしたか。

看護婦 ええ、何でも「桜橋の駅、桜橋の駅」って、うわごとのように言ってましたよ。そこに行く途中だったんですか？

ナレーション 自分でもなぜ“駅に行かなくては”と思い込んでしまったのか分からないのですが、その日は、どうしても“桜橋の駅へ行かなくては”と朝から思い詰めてしまったようです。…桜橋の駅、今はもう、そんな駅のあったことを知る人も少ないでしょう。でも、わたしにとっては、決して忘れられない駅なのです。

もう 50 年以上も前のあの日、わたしはあの駅で、ある人と約束を交わしたのです。一生かなうことのない約束を…。

あの戦争のころ、と言っても、今の方にはお分かりにならないでしょうか。わたしが物心ついたころから、日本は、最初は中国と、やがては全世界を相手に、いわゆる“15 年戦争”と言われる長い戦争をしておりました。父は手広く商売をしており、軍需景気とあいまって、経済的には恵まれておりました。2 人の兄は職業軍人としてお国のために尽くしており、それは妹のわたしにとっても誇らしいことでした。“産めよ増やせよ”の時代で、わたしの舌には、幼い弟と妹がおりました。

女学校を卒業しましてからは、手伝いをしながらお花、お茶の手習いをして、来るべき縁談に備えておりました。

はるえ ねえ、どうしてお父様は次々に縁談に反対なさるのかしら。

母 (ため息をついて)それが、いつもはっきりとした理由がないの。ただ、「こんな時代に嫁に行っても、いつ何があるか分からん。はるえを戦争未亡人にしたくない」なんておっしゃるばかりで。

はるえ 心配性ねえ、お父様は。この間だって、海軍の隆志お兄様からのお手紙に、「快進撃を続けています」って書いてあったのに。まあいいわ。わたしもすぐにお嫁に行きたいわけじゃないし。

母 ほんとに、どうでしょうねえ。あ、そう言えば、隆志の手紙に、今度の休暇にはお友達を連れてくるって書いてあったけど…。(F/O)

ナレーション 今にして思えば、父は商売人の鋭い感覚で、時代の空気を感じ取っていたのでしょ。確かにその時、世の中は思わしくない方向に急激に傾いていたのです。けれども、昭和 16 年の、あの真珠湾攻撃以来、わたしたち国民にもたらされるニュースは威勢のいいことばかり。日本の勝利を信じて疑わないムードが国中にみなぎっていたように思います。

(効果音) (ガラガラ、玄関の引き戸が開く音)

隆志 ただいま帰りました。

はるえ (奥から出てきながら)隆志お兄様? お帰りなさい。電報下さったら駅までお迎えに行つて…あつ。

東郷勇作 こんにちは。お邪魔します。

はるえ (小さな声で)いらつしやいませ。

隆志 同僚の東郷勇作君だ。海軍兵学校時代からの親友なんだ。

勇作 中島君の誘いに、ずうずうしく甘えて伺いました。よろしく願ひします。

隆志 どうした、はるえ。東郷が余りにりりしい、いい男だから、見とれたか。(笑う)

はるえ (慌てて)嫌だわ。お兄様つたら、何言つてるの。

ナレーション それが、わたしとあの方、東郷勇作さんとの、最初の出会いでした。兄と共に我が家で休暇を過ごす間、彼はわたしを妹のようにかわいがつてくれ、珍しい話もたくさん聞かせてくれました。

勇作 はるえちゃん。南の海はね、本当にきれいなんですよ。サンゴの花が咲いていてね。潜つても潜つても、底の底まで見えるほど水が澄んでいるんだ。

はるえ へえ、すてき。一度でいいからわたしもそんな海を見てみたいわ。

勇作 いつか、はるえちゃんにも見せてあげたいなあ。

ナレーション そんな話を聞きながら、わたしの胸のうちには、いつしか彼へのほのかな思いがわき上がつてくるのでした。

はるえモノローグ ああ、早く日本が勝つて、戦争が終わればいいのに。そうしたらあの方も、もっとわたしのそばにいてくださるのに。

ナレーション けれどもわたしたち国民の浮かれ気分はつかの間でした。政府はひた隠しにしておりましたが、開戦の翌年昭和 17 年 6 月のミッドウェー海戦で大敗を喫して

以来、戦局は日々悪化の一途をたどっていたのです。昭和 18 年 5 月、アッツ島守備隊は全滅に追い込まれましたが、それは“名誉の玉砕”と政府によって美化して報道されました。一般の成年男子も次々に戦場に送られ、9 月には、わたしたち 25 歳未満の女子が“勤労挺身隊”として動員されることになりました。そのころには、東京、名古屋、神戸などの都市部への空襲が始まっており、わたしたちは“空の要さい”と言われた B29 の襲来におびえながら、工場に通ったものでした。

(効果音) (工場内の機械音。金属を削る音。)

監督官 いいか、君たちは、大和なでこの青春をかけて、お国のために尽くすのだ。この工場で作る部品は、軍の飛行機のエンジン部を組み立てる大切なものだ。くれぐれもお国の資源を無駄にすることがないように、細心の注意を払って作るように。

(効果音) (機械音)

はるえ あ、いけない、また曲がっちゃった。

友人トミ子 難しいわよね、これ。

はるえ 今度こそ、よいしょ。

(効果音) (サイレンの音)

ナレーション そんな工場での作業も、たびたびの空襲警報で中断されることが多くなったある日のこと。わたしに思いがけない電話がありました。

勇作 (フィルター音)もしもし、はるえちゃん？ 僕です、東郷です。

はるえ 東郷さん！ 今、どちらに？

勇作 今、短い休暇で帰ってきているんです。またすぐ戻らなければならない。その前に一度会えないだろうか。

はるえ はい、喜んで。

勇作 あさっての 15 時、桜橋の駅で待っています。

(効果音) (駅の雑踏音。電車音など)

勇作 やあ、急に呼び出してすまなかったね。ここでは人目につくから、少し歩こうか。

(2 人、歩きながら)

はるえ 東郷さん、今度はどちらのほうへ？

勇作 ごめん、それは軍の機密だし、実際、自分たちにもまだ知らされていないんだ。多分、南方方面だと思う。今度は…長くなるかもしれない。もしかしたら…。

はるえ もしかしたら…？

勇作 いや、何でもない。

はるえ ねえ、ご出発はいつ？ わたし、お守りを作って差し上げたいわ。

勇作 ありがとう、はるえちゃん。でも僕はこれがあるから、大丈夫だよ。

ナレーション　　そういつて彼が胸のポケットから取り出したのは、1冊の古びた本でした。  
勇作　　これ、聖書なんだ。キリスト教のバイブル。  
はるえ　　キリスト教？ 東郷さん、そんな敵性宗教の本なんか…！  
勇作　　(笑って)そんなことないさ。良い言葉がたくさんあるよ。最近僕が心を引かれて  
いるのは、ここなんだ。「幸いなるかな、平和ならしむる者。その人は神の子  
ととなえられん。」(マタイ5:9)キリストの言葉だよ。  
はるえ　　平和ならしむる者？  
勇作　　そうだよ。今、我々は世界平和のために戦っている。大東亜共栄圏を築き、世  
界を平和で豊かにするために。だけど最近、ふと疑問に思う時があるんだ。戦  
地のありさまを目の当たりにすると、この戦いが本当に平和につながるんだろ  
うかってね。キリストは、こうも言ってる。ほら、ここ。「すべて、剣を取る者は剣  
にて滅ぶるなり。」今の僕には、何が本当のなすべきことかよく分からない。今  
度の戦いで答えを見つけられれば、と思うよ。自分なりに、本当の平和のため、  
祖国を、家族を、それに…君を守るため、精一杯戦ってくるつもりだ。はるえち  
ゃん、これからは本土も大変だと思う。どうか、必ず生き抜いてください。そして、  
僕を待っていてくれませんか。  
はるえ　　東郷さん…。  
勇作　　生きて帰ってこられたら、必ず一番に君のところにきます。だから、君も頑張っ  
てください。  
はるえ　　きっと、きっとお待ちしています。約束なさって。必ず具無事でお帰りになると。  
勇作　　約束する。またあの桜橋の駅で会おう。もし空襲でこの辺りが焼かれても、駅  
ならきっと分かるはずだ。  
ナレーション　　それから間もなく、彼は旅立っていきました。海軍の白い軍服姿もりりしい1枚  
の写真と、この約束をわたしに残して――。

<後編>

(効果音)　　(工場の昼休み。遠くで女子学生たちの「隅田川」の合唱が聞こえる。)  
(向こうから女学生たちが駆けてくる。)  
女学生1　　お姉さまたちも一緒に歌いませんか？  
女学生2　　何をお話ししてらしたの？  
トミ子　　今ね、この人の大切な婚約者の話を聞いてたの。海軍の将校さんなのよ。  
女学生1　　わあ、ステキ。  
トミ子　　それがね、その方、今度南方の戦局の厳しいところにやられるらしくって、心配  
なのよ。  
女学生2　　あら、お姉さま。そんな心配なんていけないわ。  
女学生3　　そうよ。お国のために召されていらっしやるなんて、ステキじゃないですか。

女学生1 うらやましいわ。ああ、わたしも男だったら、喜んで志願して、お国のために命が捨てられるのに。

ナレーション 女学生たちの無邪気な言葉を聞きながら、わたしの心は複雑でした。少し前まで、自分も彼女たちと同じように、戦地へ赴く男性たちを励まし、見送ってきました。けれども今、愛する人が命を懸けて戦うことを喜ぶ気持ちにはなれないのでした。

(効果音)(音楽) (回想)

勇作 春江ちゃん。僕は、祖国を、そして君を守るため、平和な世界の建設のため、戦ってくる。きっと待っていてほしい。

はるえ いつまでもお待ちしています。東郷さん、約束なさって。ご無事でお帰りになると。

勇作 約束する。きっとまた、あの桜橋の駅で会おう。

ナレーション あの時の約束を胸に、銃後の務めを果たすべく、日々挺身隊の勤労奉仕に励むわたしでした。そんなある日、我が家に悲しみの知らせが届いたのです。

はるえ ただいま。

母 (声を押し殺して泣く)

はるえ お母様、どうしたの？ 何があったの？

母 あ、はるえ。隆志が、隆志が…。

はるえ 隆志お兄様が、戦死…。まさか、うそよ、そんなの。

父 泣くのはやめなさい。人に聞かれたらどうする。

母 明日からは泣きませんから。今晚一晩だけ、泣かせてください。

ナレーション そう言うと、母は兄の軍服を抱いて、一晩中声を殺して泣き続けました。父は一言「人様の前では決して涙を見せるな」と言って、独り書斎にこもっていました。一家の支えてあった長兄の死を悲しむ間もなく、空襲は日ごとに激しくなり、工場に出勤しても、ただ警報におびえるばかりの日が続きました。

(効果音) (工場の中。機械音)

はるえ あの、課長さん。気筒洗浄用のガソリンは、まだ届かないのでしょうか。

課長 ああ、今日はもうムリだろうな。

トミ子 それでは作業が遅れて、兵隊さんたちの乗る飛行機に差し支えてしまいます。

課長 (ふとため息を漏らし) まあ、あんた方のような女の子たちまでが、こんな仕事に駆り出されるようじゃ、先が見えてるよなあ、この戦争も。

ナレーション 当時、こんな考えの大人も少数ですがいたのです。しかし大方の国民は、大本営発表をひたすら信じ、本土決戦も辞さぬ構えで、竹やりやなぎなた訓練に励んでいたのです。

そしてあの昭和20年、1945年8月15日、日本の一番長い日が訪れました。

(効果音) (玉音放送)

はるえ(モノ) 日本が負けた…。必ず勝つと、神風が吹くと信じていたのに…。

母 隆志は、隆志は何のために死んだの？ これじゃ、まるで犬死にじゃないですか。あの子があんまりかわいそうすぎますよ。

ナレーション しかし、もうこれで空襲におびえなくてもいいのだ、とホッとしたのつかの間、本当の地獄は、敗戦のその日から始まったのでした。

(効果音) (街中のざわめき)

人々1 ほら、押すな押すな！

人々2 ちゃんと並んでるんだぞ

人々3 赤ん坊がいるんですよ。

人々4 だから何だってんだ！

はるえ お母様、見てちょうだい、あの行列。雑炊かしら。

母 まあ、あんなに…。

はるえ とにかく、わたしたちも並びましょう。さ、早く。

人々3 ちょっと、あんなたち、一番後ろはあっちだよ。

人々5 横入りしないでくれ。

はるえ あ、お向かいの山本さんだわ。こんにちは。これ、何の行列ですか？

山本ルツ子 あら、中島さんのとこのお嬢さん。あの食堂で雑炊を売るっていうんで、皆並んでるんですよ。もっとも、お宅みたいな軍人さんのご家族の口に合うようなものじゃありませんけどねえ。

人々1 何だって、軍人だって？

人々3 うちの息子はね、軍人さんの言うことを信じて、赤紙で引っ張られていって、海の藻くずと散ってしまったんだよ。息子を返しとくれよ。

人々5 軍人なんざ、国賊だよ。国賊に食わせる雑炊なんかないよ。帰りな！

ナレーション 母とわたしは、ショックの余り立ち尽くすばかりでした。しかし、それにしても、ついこの間まで、お国の守り神ともてはやされていた兄たちが、国賊とまで言われなければならないとは…。それからの我が家は、“国賊の家”と指差される立場になってしまったのです。けれども家に閉じこもっていてもは飢えが募るばかり。恥ずかしさをこらえて行列するほかはありませんでした。そのうちに母は、生活のための無理がたたって寝込んでしまいました。

はるえ はい、お母様、お夕飯よ。また雑炊ですけど、我慢してね。

母 すまないわね、はるえ。あなたにばかり苦勞をかけて。わたしは何もできないし、お父様も、去年からの無理がたたって寝付いてしまうし。章が無事に帰ってくれたらねえ。(せき込む)

ナレーション けれど、母の最後の願いもむなしく、やがて2番目の兄の戦死広報が届いたのです。でも、その知らせを聞いても、もう涙も出ないほど疲れ切っていたわたしでした。人間は心身ともに疲れ果てると、肉親の死の悲しみさえも薄らいでしまう

のだと、わたしはその時初めて知ったのです。2人の兄を失い、両親は病に倒れ、疎開先から幼い妹と弟が帰ってくると、一家の生活はすべてわたしの肩にのしかかってきました。

はるえ(モノ) どうしよう。一体どうしたらいいの？ これからかぞくぜんいんの食料を、どうやって手に入れたら…。

妹 お姉ちゃん、おなかすいた。

弟重雄 僕、もう動けないよ。何か食べたいよお。

はるえ はいはい、待っててね。明日はきっと農家の人から、お米やら野菜やら、分けてもらってきますからね。お母様、残念だけど、またもう少し、お着物出してくださいね。この前のも結構喜んでもらえて、随分お米やらお芋やら頂けたのよ。

妹 お姉ちゃん、あたしの雑炊、お米が7粒しか入ってない。重雄の方が3粒も多いの。ずるい。

重雄 だって、昨日は僕の方が少なかったもの。いいだろ。

母 ああ情けないこと。いつまでこんな生活が続くのかしら。(せき込む)

はるえ(モノ) もう少しよ。もう少し辛抱すれば、きっと東郷さんが帰ってきてくださる。約束したんだもの。必ずまた会うって。それまで、何があったって、わたし、頑張ってみせる。

ナレーション それから数日したある日のことでした。やせこけた一人の男の人が訪ねてきたのです。

男 中島…はるえさんでしょうか。

はるえ はい、そうですけど。

男 む、無念であります。(男泣き)

ナレーション その人は、命からがら復員してきた長兄の同僚でした。わたしは、その人から、ひそかに恐れていた東郷さんの最期を聞いたのです。敗戦の年、何とか劣勢を挽回すべく、日本軍は次々とフィリピン沖に結集し、兄や東郷さんの部隊もその中に入ったこと。そしてリングエン湾で艦もろとも海中に沈んだこと。そのため、遺品も何一つ残らなかったこと。自分は必死で泳ぎ、敵艦に助けられて、九死に一生を得たことなど―。覚悟していたとはいえ、余りにはかない気がして、わたしはその場にへたり込んでしまいました。わたしに残されたのはたった1枚の写真と、そしてかなうことのなかった再会の約束だけでした。

けれども、彼との永遠の別れを悲しむことさえ、あのころのわたしには許されなかったのです。戦後の荒廃と復興の日々を、わたしはがむしやりに生きてきました。―あれから54年。あの戦いのもたらしたものは何だったのか、今改めて考えさせられます。本当に、“平和をつくり出す戦い”というものは存在するのか。あの古びた聖書を胸に、南の海に散った愛する人を思うとき、自問せずにはいられません。

わたしは、この年になって、やっと聖書を買って求め、あの方のようにひもとくようになりました。

「すべて剣を取るものは、剣にて滅ぶるなり。」

今はっきりと言えることは、真の平和が、剣によって、武器によってもたらされることは決してないのだということです。彼は、あの戦いの意味を、答えを手に入れることができたのでしょうか。再び相まみえる日がもしあるのなら、尋ねてみたい気がいたします。

(完)